

林屋先生を偲ぶ

下坂 守

昨平成十年（一九九八）二月十一日、京都国立博物館の元館長林屋辰三郎先生が八十四歳で逝去されました。先生は昭和五十三年（一九七八）三月から同六十年四月までの七年間にわたり館長を務められ、その間、当館の発展のために尽くされた業績は、多大なものがあります。

館長に就任された先生が、まず最初に実行されたのは、博物館活動の中心に調査・研究を据えることでした。今後の展示・普及活動は、館内外にわたる幅広い調査・研究活動に基づいて行われるべきだというお考えによるもので、そのため創刊されたのが研究誌『学叢』（昭和五十四年三月創刊）であり、「京都社寺調査」の開始でした。

『学叢』が内外から高い評価を受けるいっぽう、「京都社寺調査」が幾多の貴重な文化財の発見の場となり、それらをもとに数々の内容豊かな展覧会が開催されてきたことはよく知られている通りです。この二つの事業が、今日の当館を特徴付ける一つとなつていっても決して過言ではありません。

また、施設として当館を特徴付ける文化財保存修理所と京都文化資料研究センターが創設されたのも、先生のご在任中のことでした。この新たな施設の創設にあたって、先生は調査・研究を運営の柱として位置付けられ、文化財保存修理所において修復する機会にしか確認できない銘文を「銘文集成」として、『学叢』に掲載することとなつたのはその代表的な一例といえます。

館長をお辞めになったのちも、先生は評議員として九年間にわたり、当館の運営を高所からご指導下さいました。先生が最後に当館にお出でになられたのは、平成九年十月の百周年記念の展覧会の時でした。不自由な御体をおしてご参加下さった先生が、百周年を心から喜んで下さっていたのが、昨日のことにように想い出されます。

館長時代、職員が参加する慰安旅行や忘年会の場には、常に先生の柔和な笑顔がありました。先生の博物館改革に職員が積極的に取り組んでいたのは、そのお人柄によるところが大きかったようにも思われます。高名な歴史学者であるにもかかわらず、同じ職場に働く者として、いっしょに飲んで歌って下さった先生との楽しいひとときは、今も職員たちの忘れられぬ思い出となっています。

先生が残して下さった崇高な精神と誇りを失うことなく、より多くの人々に親しまれる博物館をめざすことを、先生の御霊前に誓い、追悼の言葉に代えることとします。